

<b>Title</b>	人格化される熊（3）：北方民族における熊理解
<b>Author(s)</b>	永井, 理恵子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢,21(3)： 143-153
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=900">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=900</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 人格化される熊 (3)

— 北方民族における熊理解 —

永 井 理恵子

The Personification of the Bear (3):

— Bear in Stories, Deism, Old Tales

Rieko NAGAI

There are so many different types of characters with such varying designs in Japan today. Most of these characters are taken from animals but are often inspired by human beings and plants. More than that, there are even imaginary characters. Not only do we see them around children as toys but also as decoration in homes.

Why are these characters so attractive to people? Characters allow people to have hopes and dreams for their lives, emotional balance, and a deep feeling of happiness. In this paper, the writer specifically picked the stuffed bear to analyze why it (a little bear) is so loved by people. At the same time, the writer looks at fairy tales and picture books in which bears are often present. The writer also studies what those fairy tale writers think of bears and why they write about them.

---

**Key words:** くま送り, 北方民族, ヒグマ, クマの生態, クマの子育て

### はじめに

#### (1) 考察の目的と課題

本研究ノートは、『聖学院大学論叢』第20巻第1号、第2号に掲載された同題目(1)(2)に続くものであるので、考察の目的と課題は省略する。

## (2) 課題に接近する視点

本ノート(1)では、課題に接近する視点として、キャラクターの「くま」の原型である動物の熊の生態の簡単な紹介と母熊の持つ母性、および、ぬいぐるみの「くま」であるテディベアの魅力の秘密とそれが人間に及ぼす心理的影響について、2章にわたって述べた。続く(2)では、世界各地において熊と人間が築いてきた関係の幾つかの実際と、文学における「くま」の存在に焦点を当てて論じた。(2)では特に、ロシア、アイヌ、フィンランドの各地における熊と人間との関わりの歴史についてごく簡単に紹介し、併せて文学や絵本に描かれる熊について幾つか紹介をおこなった。

その後、筆者は、さらに熊と人間との関係について様々な追究を重ねてきた。その過程で見えてきたことは、多くの動物の中であって熊は、人間を魅了してやまない、そして神秘に満ちた霊性なども持ち合わせている、非常に特異な動物であるということであり、熊を愛し、研究対象として生涯をかけて熊と向き合う人々がいることを知った。それでも野生のクマの生活の実態については今なお不明な点が多く、研究の余地も大きいようである。クマのぬいぐるみによって子どもが魅了され、テディベアに子どものみならず大人までもが惹きつけられ、そして古くから熊を特別な神的存在として認めて関係を作ってきた人間の歴史の事実、熊という動物の世界が人間にとって神秘に満ちた、容易には解明できないものであること、動物の中でも特に人間に興味関心を抱かせる独特な存在であることを、筆者に深く考えさせるものであった。子どもの「移行対象」(本ノート(1)参照)の「ぬいぐるみ」として特に愛好されているクマが、その背景に、愛される強い意味を内包していることが感じられる。

今回の(3)では、(2)執筆以後に出会った熊研究の世界の一端を紹介したいと思う。もとより筆者は熊学の研究者ではないので、あくまで入門的な考察に留まるものではあるが、(3)では(1)と(2)でおこなった考察の一部を深め、熊の生態的特徴、および世界の北方民族における熊理解について、さらに少し考察を重ねることとする。本ノートにおける考察を経たのちに、人格化される熊について、幼児を取り巻く絵本やぬいぐるみなどの物的教育環境に観点を絞って、(4)をもって、まとめてみたいと考えている。

なお、本稿においては、全体をとおして動物学的な視点から述べることになるので、「クマ」という片仮名表記を用いることとする。

## 第1章 クマの生態的特徴

筆者は、本ノート(1)において、クマの生態的特徴について若干の考察を試みたが、その後、さらに追究を重ねるうちに、その独特の生態的特徴について知ることとなった。第1章では、幾つかの要点に絞って、クマの生態を紹介したい。

筆者は今夏、飼育されている多くのクマを間近に見る機会を得た。見たクマの種類は、北海道に

多く野生で生息しているヒグマである。多くのクマの様子を実際に観察し、あらためて驚かされたのは、クマの動作が極めて人間のそれと似て見えることであった。本ノート(1)(2)でクマの生態的特徴について書いた際にも、物語の中に描かれたコグマの特徴を書いた際にも、そのいずれにもクマの動作や姿勢が人間に酷似しているということは確認していたのであるが、実際に実物のクマを観察すると、それは驚くほどに確かであった。

クマは、後肢で直立に起立し、そして歩く。曲芸を仕込まれたクマがサーカスなどで見られるが、一部の動物が普段は全くしない動作や姿勢を仕込まれて見せるのとは異なり、特別な芸を仕込まれたクマだけが立てるようになるのではなく、全てのクマが直立に起立することができる。そしてクマは後肢で歩き、走る。後肢で立ち歩くことができるため、前肢を手・腕として用いることも可能である。座る姿勢も、人間が足を投げ出して座る格好と全く同じに見える。

このように、動作が人間と非常に似ているにもかかわらず、クマの形態は、人間とは似ていない。種が異なるのであるから当然であるが、サルがヒトと似た形態をしているのに対し、クマは、その体型も顔の構造も、人間とは全く異なっている。その、人間とは異なった形態をしている動物が、人間と似た動作や姿勢を取るというところに、得も言われぬ不思議な感覚を持った。ただし、今回、筆者が見ることができたクマは無論、野生のものではなく飼育されたものであるため、古来より人間がクマに対して抱いてきた畏敬の念を抱かせる何物かを、飼育クマから感じ取ることは難しかったと言えるだろう。

以下、主として「のほりべつクマ牧場ヒグマ博物館」における展示と、その展示内容が掲載されている書『よいクマわるいクマ』における記述をもとに、クマの生態について、(1)より若干、詳細に紹介しよう。

### (1) クマの起源、種類と大きさ

クマは2000万年ほど前、「ウルサバス・エレメンシス」という、体長50センチほどの小型で尻尾の長い哺乳類が、亜熱帯気候のヨーロッパに出現したのがその起源である。700万年位前、クマ（ウルサス）属最初の「ウルルス・ミニマス（小型クマ）」という体長1 mほどのクマが温帯気候のヨーロッパに出現し、そこから進化した「ウルルス・エトルスクス（エトルリエクマ）」が250万年位前に生息していたという。

その後氷河期に入り寒さに適応して変化し、現在のヒグマの特徴が形成された。大型化が進み、体型がずんぐりむっくりし、尾も短く、でこぼこの少ない体型となった。この体型は、体表面積が少なく、熱放散が少ないので、寒さに適したものであったと、前掲書は記している。125万年位前、この「ウルルス・エトルスクス」から出現したのが、ヒグマとホラアナグマである。現在、ヒグマの最古の化石は、中国の周口店で北京原人が発見された、今から50万年前の地層から出土している。それから北半球に広く分布を広げ、現在に至る。ホラアナグマはクマ類の中でも最も大きく、現在

### 人格化される熊(3)

のヒグマの2～3倍もあり、より草食性で最もクマらしいクマと言われているが、今から1万5千年位前に最後の氷河期において絶滅したとされている（クルテン，1976）。日本には約3万年位前、大陸づたいにヒグマが入ってきたと見られている。

クマ科は現在、世界で7種が確認されている。その7種とは以下の7種である。

マレーグマ

ナマケグマ

ヒグマ

アメリカクロクマ

ツキノワグマ

ホッキョクグマ

メガネグマ

これにジャイアントパンダを加えると8種となる。

これらの中で最も大型なのはホッキョクグマで、最も小型なのがマレーグマである。同種の中でも体のサイズは様々で、たとえば北海道に多く生息しているヒグマは日本では平均で200キロ前後しかなく、世界平均330キロを大きく下回っている。この体の大きさの違いは食糧によるのではないかと考えられており、サケ・マスなどの魚を多く食べられる地域のクマは大型化すると見られるそうである（前掲書 p.112）。冬ごもり前にはたくさんの食糧を摂取するため皮下脂肪は8cmにも達するが、春にはすっかり無くなっていると言う。冬ごもり期間中は全く食糧を摂取しないからである。

いずれの種においてもクマは生息数が減少している。その理由は多くあり、本ノートでの紹介はしないが、食糧事情の問題や、捕獲が進んだことなども挙げられる。

## (2) 身体的特徴と子育て

クマと一言と言っても、その種によって正確には異なる身体的特徴である。ここではヒグマについての記述を紹介する。

体型は、寒さに適応した、「ずんぐりむっくり」（同 p.116）なものである。小さな目と大きな耳が愛らしく見える。見かけに反してヒグマは走るという。走る速度は時速60キロにもなり、急斜面を登り降りしたり、コグマは木にも登る。

前肢は後肢に比べて機能的に非常に発達しており、争いの場面では勿論、食糧を採取したり、コグマを育てたりするのに活用する。全身の筋肉が発達している。

クマの足は非常に特徴があり、特記に値する。クマの足は「蹠行」（シャコウ）と言い、中手骨（チュウシュコツ）を地に付け、踵も地面に付けて歩く。このため、クマは二足直立や二足歩行が可能なのである。

次に、クマの身体各所の特徴を見てみよう。歯は臼歯が多く、犬歯が目立つため肉食と思われるが、意外と雑食である。雑食であるため虫歯にもなりやすい。嗅覚が非常に発達しており、犬を超える精度であるという。それに対して視覚はさほど優れていないが、涙腺を持っているため涙を流す。聴覚も優れており、大きな耳介で音を掴む。

最後に、クマの子育てについて簡単に見る。クマの妊娠と出産は、季節の変動に伴う。受精期は6月であるが、受精卵の着床は10月中旬である。この時期にどの程度の食糧を摂ることが可能であるかにより、着床するか否かが決定するという。出産は1月頃、つまり妊娠期間は僅か三ヶ月程度であり、非常に未熟な状態で子を産む。ヒグマの母乳は豊かな栄養を含むものである。コグマは4月下旬から5月中旬に、母クマと共に巣から出てくる。コグマは6月頃に離乳し、それからは母クマと同じものも食べる。クマの子育ては、母クマが身を張ってコグマを守りながら育てる。親からの独立は翌年の秋で、約2歳弱で独立する。

母クマがコグマを育てる様子は、非常に慈愛に満ちており、その姿は人間の子育ての様子を連想させるものである。授乳の際の姿は人間に酷似しているし、母クマがコグマを守ろうとする気合いは並大抵のものではない。コグマが鉄道や車に轢かれそうになれば、自分の身を挺してコグマを助ける。これは、クマの子育てには父クマが全く参加しないどころか、ともすればオスグマがコグマを食い殺してしまったりすることもあるための、子を守る本能であると考えられている。

## 第2章 アイヌ民族「イオマンテ」儀式に見られるクマ観

続く2では、アイヌ民族がおこなうイオマンテ（くま送り）の儀式について、本ノート(2)に付加し、具体的な儀式とそこに見られるクマ観について紹介する。

本ノート(2)第1章において、「歴史に見る熊と人間との関わり」と題し、ロシア、アイヌ、フィンランドという3つの地域・民族における熊との関わりについて簡単に紹介したが、その後の追究により、これら3地域・民族はいずれも、いわゆる「北方民族」と呼ばれる人々であることが整理できた。そして、北方民族と呼ばれる人々はいずれも、共通した思想や文化を形成してきていることが理解された。そこでここでは、幾つかの北方民族におけるクマと人間との関係について簡単に紹介したいと思う。内容の出典は、『Northern Peoples: 北方民族を知るためのガイド』の記述による。

### (1) 北方の主な民族と生業、世界観

人間は、その起源を亜熱帯地方に持つ。アフリカの熱帯で、二本足で歩く「人類」（猿人：アウストラロピテクス）が誕生したのは、現在、およそ500万年前と推定される。初期の人類は数百万年の間、温暖な気候と恵まれた自然の中で暮らしてきた。およそ170～180万年前に原人と呼ばれるホモ・エレクトスが登場し、その後初めて居住地がアフリカを出てヨーロッパやアジアへと拡大し

ていった。このような人類の進化には、獲物を捕ったり食物を加工したりする石器などの「道具」を作り、それを使うようになったことが、行動の様式に大きな影響を与え、手指や脳の発達など身体の形質を変化させてきたと考えられている。すなわち物質文化の発展によって、現在のような身体的特徴をもつ新人（ホモ・サピエンス）が生まれ、世界の隅々にまで居住域を拡大したということもできる、と、前掲書は述べている（p. 2）。

熱帯・亜熱帯で誕生・進化してきた人類は、徐々にその生活領域を広げたが、アジアでは北緯30～40度といった温帯に約百万年間、留まり、冬の寒さの厳しい高緯度地域にはなかなか定住に至らなかった。温帯では食糧を植物に頼っていたと考えられており、狩猟具の発達は余り見られなかったが、約6～7万年前にアジアの北方で槍が発明されると、危険な動物を遠くから捕獲することが可能となり、寒冷地に生息する大型哺乳動物や猛獣も狩猟対象となった。北方地域では、食物はもちろん、衣類やテントの覆いものとしての毛皮などの生活に必要な資源を動物に負うところが大きいため、狩猟技術はシベリアで発達し、北緯60度の壁はここで越えられたのだという。

こうして北方地域で暮らす技術を身につけた人類は、1万2千年前までにはシベリアの東端から新大陸のアラスカへと渡り、さらに居住域を拡大していった。人類が温暖で暮らしやすい地域に安住せず、なぜ北へ向かったのかについては諸説があるそうである。マンモスやケサイなどの大型草食獣を追って行ったのか、人口圧や敵対関係によって押し出されたか、氷河期の寒冷な気候が緩んだ間氷期に高緯度へと進み、寒冷な気候が戻ってきたときにはそこで適応することを余儀なくされたのか、いずれにしても人類は好奇心旺盛な動物であり未知の土地を求めて旅をするものであるといった考えもあるという。

北方地域の人々は、文化に違いを持つ数十の民族集団として認識されているが、北ヨーロッパのサミと呼ばれる民族を除くと、シベリアから北アメリカまで居住する「モンゴロイド」と呼ばれる人々であり、アジアに起源を持ち、そこから現在の居住地へと移住を繰り返しながら形成されてきた人々である。

民族によって違いはあるものの、総じて北方民族の生活に欠かすことのできない衣料や食料の素材は生業によって規定されるものであり、重要な動物としては陸のトナカイ（＝カリブー）、海のアザラシ、海のサケ・マスが挙げられる。住生活としては、資源の薄い北方地域ではトナカイ飼育をする人々は移住を基本とし、内陸部で狩猟を中心にする人も冬期は定住村を持つが、夏には漁撈のためキャンプを作るなど、季節に応じて住居を変える地域もある。定住生活をするのは大河や河口で大量の魚を捕獲できる漁撈民と、漁撈と海獣狩猟を組み合わせたオホーツク海沿岸の住民、サケ・マスが大量に獲れ高緯度でも比較的温暖な北太平洋沿岸の漁撈民である。

農耕に適さない北方地域では、狩猟・採集が生活必需品を得る最良の手段で、動植物をとるための道具・技術・動植物の生態に関する知識などを発達させてきたが、獲物は常に捕れるものではない。そうした不安定な生活の中で、北方の精神文化にはアニミズムとシャーマニズムが発達してい

るのだという。万物に霊の存在を認めるアニミズムの世界観では、人間を含めた動物や植物などは仮の姿であり、これら自然界を支配する〈主〉がいて、人間が良いおこないをしていれば狩猟者の前に獲物が現れて肉や毛皮をとらせてくれると信じられているという。捕った獲物の魂を〈主〉のもとへ送り返し、また獲物を遣わしてほしいと祈りを捧げるのが、熊送り儀礼などの基本的な考え方となっていると、前掲書は述べている（p. 7）。シャーマンはこれら霊と交信する特殊な力を持っており、人々から大変に畏敬されているという。限りある不安定な資源を有効に得て利用する技術と、動物や植物に対して畏れ敬う心を持ち、ヒトも自然界の一部であるという世界観を築きあげたのが、北方民族であるという。

アイヌのイオマンテ（熊送り）に似た儀式について前掲書は、次のように紹介している。北方では狩猟、漁撈、野生動物の採集が生活の基礎をなしてきた。トナカイの飼育を行っているところでも、その世界観は基本的には狩猟民的であり、猟獣が中心的な役割を占めている。その一つの現れは「クマ祭り」（p.12）で、狩りで仕留めたクマを儀式に用いる民族と、飼っていたクマを儀式に用いる民族とがいる。狩りで仕留めたクマに対して儀式をおこなう民族は、スカンディナビアから北アメリカに分布し、一方、飼っていたクマを殺す形式はアムール地方から北海道にかけて分布している。本ノート(2)で紹介したフィンランドの人々の「クマ祭り」儀式は狩りで仕留めたクマを用いていたし、一方のアイヌは飼って育てたクマを用いて儀式をおこなうのである。

狩猟に伴ってクマ祭りをおこなうエベンキヤエベンと呼ばれる民族は、クマ祭りはクマ自身が創設したものと考えている。クマ自身がクマ狩りの仕方とクマの死体の処理法を人間に教えたと考ええる。これは北方に多い、獲物のほうから自分から人間に獲ってもらいにやってくるという観念と関係があるという。

一方、アイヌは、クマは自分の国を持っていて、そこから毛皮をまとめて人間のところに来ると考えていた。アイヌには北方諸民族の信仰と同様、海や山、集落の護神さらに特定の岬や山、湖などの神々への信仰がみられるという（p.18）。狩猟・漁撈民であるアイヌは獲物の豊猟（漁）や再訪を願う動物送り儀礼を重要な儀礼とし、なかでも「クマ送り」儀礼がよく知られているものである。一般に知られているところでは、春グマ猟で捕らえた子グマを冬の初めまで、あるいはもう1年育ててから殺し、霊を送るクマ送り儀礼である。こういった方式の「クマ送り」儀礼は、たとえば他にはアムール川下流域とその周辺、およびサハリンの北部を中心とした地域に居住してきたニブフと呼ばれる北方民族でも行われている。クマは人間であり、その毛皮は着衣にしかすぎないと考えられてきた。ニブフでは、数年間飼育したクマを殺し送る飼熊型のクマ送りをするが、これはあらゆる儀礼の中でも最も盛大に行われるという（p.26）。

## （2）アイヌにおける「イオマンテ」の儀式とその思想

本ノート(2)において既に簡単な「イオマンテ」の思想と実際については記述を済ませているので、



今回は、さらに具体的なクマ送りの祭りについて紹介したい。

イオマンテの儀式は、かつては盛大におこなわれていたのであるが、戦後には殆どおこなわれなくなってきた。その方法や子細を知る古老も少なくなり、その文化的価値に反して継承が難しい実態にあり、現在では財団法人などによって、文化保存の目的によって、この儀式が開催されるに留まるようになっている。

筆者は、ノート(2)の執筆後、クマ送り儀式に関する専門書を読む機会を得、その実際について、やや詳細な知識を得るに至っている。非常に驚かされたのは、クマ送りの祭りの儀式が、大変な時間と労力、材料をかけておこなわれる、予想を遥かに超えた盛大な儀式であったことである。詳細について挙げることは不可能なので、ここでは大まかに、その儀式の内容について辿ってみる。参考文献は、『伝承事業報告書2 イヨマンテ 一日川善次郎翁の伝承による一』である。

2週間も前から、儀式に使う特別な酒造りが開始され、数日前から様々な用材の調達、供物の準備などが始められる。食物としては酒のほか、餅、煮物、炊き込み飯といったものが、女性によって作られる。儀式に使う様々なものを作るために、10日ほど前から用材の調達が始まり、2～3日前から男たちの手で作られる。クマの着物も作られる。クマに持たせる土産も用意される。

前日からは、各種の祈りが捧げられる。儀式は前日から開始されるのである。夜は家の中で、飲食を共にし、楽しい踊りや歌、語り物が演じられる。これは深夜まで続けられ、その楽しいひとときを、家の隣の檻に入って翌日に天の神の国へ旅立つ熊に聞かせたのだという (p.71)。

当日の「本祭り」には、多くの儀式が展開される。そのごく一部をここで紹介する。送られるコグマは、送られる前に、檻から出されて、しばし遊びのひとときを持つ。その後、木や矢を用いて、クマの魂を肉体から離すのである。そのさいはもちろん、祈りが捧げられる。

ここに、熊の魂を肉体から離したあとにおこなう祈り(カムイノミ)を紹介する(日本語にしたもののみ紹介)。

「我々が育てた子熊よ

このように

神々が計らって

下さって

これから

神の村

神の国へ

あなたは行って

父のもと

母のもと

ひざもとに

食べ物と一緒に  
酒と一緒に  
うまく  
あなたは行って  
行くだろうから  
無事に  
この村に  
村に  
今まで  
あなたは暮していたが  
父のもとへ  
母のもとへ  
あなたが着いて  
行くように  
重い神  
神から  
ことづけをして  
下さるでしょうから  
安らかに  
決して  
怒りの気持ち  
憤りの気持ちを  
持たれずに  
無事に  
行かれるように  
このように  
私は申し上げて  
家の中からであっても  
重い祈りを  
致しますので  
今日は無事に  
行かれるように  
申し上げながら

今から

??というものを

??するでしょう」(前掲書 pp.85～87)

この後、団子を撒いたり、天に花矢を射たりした後、熊の解体をする。内臓の処理などには全て定められた方法がある。毛皮にも畳み方が決まっている。室内に熊神が招き入れられ、祈りがささげられる。頭部は綺麗に飾り付けがなされる。祈りは何度も繰り返される。最後に男性だけで料理を作り、皆で歌い踊る。

この儀式的流れを非常に大まかに見ても、クマ送りの儀式が如何に大がかりなもので、また祈りに満ちたものであるかが、良く分かると思う。

## おわりに

本ノートでは、クマの生態的特徴と、北方民族とクマとの関わりについて、過去の研究ノートを補足するかたちで紹介してきた。クマに関する様々な著書を読むうちに、クマという動物が他の動物とは一線を画す独特の存在として人間に受け入れられてきた歴史を知ると共に、「人格化される熊」と題した筆者の一連の研究も、それを専門とする研究者らにとって未だ解明しきれない不可思議な要素を多く孕んだ、大きな課題を背後に持つものであることが明らかとなってきた。人間が、大人も子どもも、クマをぬいぐるみ化したものを愛好して止まないのも、その背景に大きな未解明の何かがあると判断できる。その未解明の何物かを明らかにするには、さらなるクマ研究者による研究が求められよう。

天野哲也は、「なぜクマ送りなのか」(『アイヌのクマ送りの世界』所収)と題した文章の中で「なぜクマは畏敬・敬愛の念を抱かれるか」という節を設け、次のように述べている。まずクマは、限らない力を持っている動物であり、それが人々を惹きつけるという。クマは陸上で生きる最大の動物であり「陸の王者」といった呼び名をされることもあるが、まさに大型であることや、優れた聴力や嗅覚を持っていることも、人間にとって魅力的なのであろう。第二に天野は、西洋の民話を引き合いに出し、オスのクマと人間の女子が性的関係をもち、その間に子どもが生まれるという民話が多くあるという。人間とクマの間にできた子どもは強い力を持ち、英雄となって活躍するという民話が多いことから、やはり人間がクマに対して畏敬の念を抱いていると述べている。そして第三に、クマが食糧の7割を植物質のものから摂取していることが重要であると述べている。食糧の残りの割を占める動物質のものも、多くは昆虫で、本来クマは人をみれば襲うといった動物ではない。すなわちクマは本来、決して猛獣ではない、と天野は述べる。この特性がなければ、クマは如何にパワフルで能力を持っていたとしても、これほど畏敬の念を持たれることはないだろう、と天野は締めくくる。これは、参考文献『よいクマわるいクマ』の多くのページが、クマに襲われるこ

とに対する対策や、クマ被害を減らす方法に割かれていることを鑑みると、非常に興味をひかれる締めくくりである。本来、クマと人間とは自然界で共生してきた。クマは人の畏敬の念、敬愛の念を受け、大切にされる動物だったのが、人間による国土開発により、人間とクマが良い距離感を保つことが難しくなってきたことが、クマ被害を増大させクマを敵対視する一部の流れを生み出す要因となっているのであろう。

クマ。この動物が、さまざまな場面で人間を魅了してきたことが、研究ノートシリーズで執筆する中で明らかになってきた。容易には理解できない、奥深いクマ学の世界。子どもも大人も愛してやまないクマのぬいぐるみやテディベアの魅力には、その原型である動物のクマが持つ魅力も内包されていると言ってよいであろう。

最後となるであろう研究ノートのシリーズ(4)では、実際に人間の大人や子どもが、クマのぬいぐるみやテディベアに、どのくらい惹かれているものであるかを、実際のデータを持って検討してみたいと考えている。

#### 参考文献

- (財)アイヌ民族博物館編集・発行『伝承事業報告書2 イヨマンテー日川善次郎翁の伝承による一』(株)北海道機関紙印刷所 2003  
萱野茂・前田菜緒子著『よいクマわるいクマ』北海道新聞社 2006  
木村英明・本田優子編『ものが語る歴史13 アイヌのクマ送りの世界』同成社2007  
北海道北方民族博物館編集,(財)北方文化振興協会発行『Northern Peoples (ノーザンピープルズ) 北方民族を知るためのガイド』(株)大成印刷 1995  
雑誌『モーリー No.13』北海道新聞社 2005  
その他 のほりべつクマ牧場ヒグマ博物館展示